



理事長就任にあたって

北海道スキー指導者協会

理 事 長 三 浦 光 男

北海道スキー指導者協会創立60周年おめでとうございます。60年の歴史を刻んでこられた緒先輩方の、ご苦労とご努力に敬意を表します。

創立60周年の節目に、理事長という大役を受けたことは、非常に責任を感じるところであり、今日スキー人口が減少する中で、当会を含めスキー界発展のために、今後何をすべきか、事の重大さに身の引き締まる思いを感じているところでございます。

私も今年で60歳になりました。昭和27年にこの世に生を受け、また、当会も北海道一般スキー指導員会として発足され、同じ時代を歩んできたことに、何かの縁を感じるところです。

思えば、準指導員に合格した時、合格証と一緒にシュプールを頂き、指導者の一員になれたことに大きな喜びを感じ、また指導員会会員証を頂き、その会員証でリフト券、協定旅館が優遇され、優越感を感じたものでした。

・ 当時のシュプール (No.12号) 1984年に、前会長故柴田信一先生が書かれた記事がありますので紹介します。(一部抜粋)

「スキー界 今日このごろ」と題して

[スキー人口が減っている・・・

日本スキー研究委員会で、ヨーロッパのスキー界の話題として出された。

その中で、我々が注目しなければならない幾つかの問題が提起された。その中の一つは、ヨーロッパ各地のスキー場で、若い人達の姿が大変少くなり、滑っている人の大部分は、中・高年齢者と夫婦の姿だという。

またスキー学校の入校者が、良くて横ばいかもししくは明らかに減少の傾向を見せ始めた。

その理由は、今の若い人々の気質、それに遊びの多様化、そして一番大きな問題は、金のかかり過ぎにある。靴、板、服装、旅費、高価なものはそれなりに良いものだ。

しかし、安価なものでもスキースポーツの目的は十分満たすことができる。

今にしてメーカーの皆さんと、特に我々指導員が深く考えないと、日本のスキー界もスキー離れという形が現れるかもしれない。

次に、スキー学校離れという問題も、我国でも2~3年前から、薄々感じておったようだ。

その原因の一つは、スキー人口の層の変化。若い人から家族中心への移行であろう。

若い人は無理がきく。家族は無理したスキーはしない。従って、学校に入る人数も回数も考えるようになった。また、ゲレンデの整備と用具の進歩から、長い時間スキー学校に留まる必要はなくなった。

最後に指導法も大きな問題となっているよう。

技術の最高のデモを養成する理論や技術を指導法に下ろし、必要以上のもの(たとえば加圧)を求めて、それは初心者の望んだスキーであるかどうか。我々は、去年あって今年は消えゆく技法、また明日をも知れない指導法に酔ってはいないか。ここにSAJと研修会の問題も、スキー人口増加のためにはどうなのか。

私は心配だ。皆で考えて欲しい。]と警笛を鳴らしておられた。

まさに今起きている問題が、すでに28年前に故柴田先生は心配されておりました。

社会情勢の影響もあり、決定的な打開策のないまま今日に至っておりますが、まさに皆で考

えなければならないと思います。

合わせて当協会の会員数減少についても、考えてみたいと思います。

1999年に8,244名いた会員数も、2011年に5,174名に減少した。

私も、以前に当協会にメリットを求めた時もあった。「千円でシュプールを購入しているだけ」、「年配者の入る会」と思われている指導者が少なくないと思います。

広辞苑で協会とは、「ある目的のため、会員が協力して設立、維持する会」とある。

当協会の目的は、第2条〔本協会は、加盟団体員相互の親睦と資質の向上を図るとともに、健全なるスキー界の発展に寄与するものとする〕とある。従って、メリットを求めるのではなく、積極的に参加することにあると思います。

最近の北海道スキー連盟の教育部メモには掲載されておりませんが、北海道スキー連盟規程に指導員の義務として「第3条(2) 指導員は所属加盟団体の事業には、優先的に参加しなければならない」とある。

指導員資格を持っていても、なかなか活動す

る場がなく、資格の保持のみに留まっている人が多いのではないかと思います。

各地区の指導員会で、もっともっと参加しやすい、活動しやすい場面を設けてあげて、多くの指導員が集えることが指導員会の活性化、ついては当協会の活性化につながっていくのではないかと考えます。

当協会も大いに協力していきたいと思います。

〈なぜ指導員資格を持とうと思ったのか?〉

「スキーをすることが好きで、この楽しさ、この魅力を他の人に教えたい」こんな思いで資格を取ったのではないか?と思います。

この初心を忘ることなく、指導員ひとり、一人が、スキーの仲間を一人でも増やしていくば、スキー人口の減少に歯止めが掛かるのではないかと思います。

私は、このスキーの魅力を生涯スポーツとして長く愛していきたいと思います。

「ブラボースキー」 シーハイル!!

